

ドイツ統治下の青島における日本人の進出 (1897～1914)

—経済活動と情報収集活動を中心に—

単 荷 君

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

第一次世界大戦勃発から第二次世界大戦終結までの間に、青島は2度、合わせて16年に及んで日本の統治下に置かれ、上海と中国東北地方（旧満州）に次いで、日本による対中国投資の最も重要な中心地であった。日本帝国勢力圏の拡大と共に、青島もそのなかに組み込まれ、多数の日本人が青島に渡った。これらの人的移動は、資本、技術、生活、文化の移動を伴い、近代青島に看過できない影響を与えていた。従って、青島日本人社会の誕生、発展、終焉の過程と、それと同時に生じた青島社会の変容を究明することは、青島史のみならず、近代日中関係史、更に東アジア近代史上の青島の位置づけを再確認するために、極めて重要な作業である。

本稿ではドイツ統治時代、青島に進出した一般日本人居留民の経済活動と情報収集活動から、当時の青島の日本人社会の内部構造と日本人の活動の実態を論じた。特に日本人たちと植民地支配者であるドイツ人、現地中国人、そして母国日本との葛藤、連携を歴史的に検証し、ドイツ統治下の青島日本人社会の具体像と全体像を提示しようと試みる。

ドイツ統治下、青島と天津、大連、上海、香港、更に海を越え、日本、朝鮮、ウラジオストクとの間に人的・物的交流が行われていた。当時海外に自由に進出することのできた一般日本人たちも、この新開地に飛び込み、300人ほどの小さな社会を形成した。しかし、従来ドイツ統治下の青島をめぐる研究は、主にドイツの膠州湾占領とドイツの植民地政策を中心に行われ、日本人社会に着目する研究はわずかである。そこで、本稿は青島日本人社会の原点に焦点を当て、まず第1章で青島に進出した日本人の人数、ルート、出身地、職業、活動区域など日本人社会の内部構造について考察する。続く第2章では、植民地支配者と現地人の間隙を縫って商業活動に従事した日本人小商人、大手商社、そして人数の最も多いからゆきさんに着目し、彼らとドイツ人、中国人との競争や共存関係をみる。更に第3章では、青島日本人が携わったもう一つ重要な活動、即ち情報収集活動を通じて、彼らと帝国日本との協力関係を検討する。そして最終章では、ドイツ統治時代の青島で暮らしていた日本人が、日本の青島占領後にどのような結末を辿ったのか、その行く末を明らかにする。

キーワード：青島、ドイツ、日本人社会、経済活動、情報収集、競争、連携

はじめに

1. ドイツ統治下青島の発展と日本人の登場
 - 1.1 時代背景
 - 1.2 日本人社会の構造
2. 日本人の経済活動—中国、ドイツ人商人との競合と共存
 - 2.1 小商人—雑貨商、写真店、大薬房の進出
 - 2.2 大手商社—三井物産の進出

2.3 ドイツ統治下日本妓楼の隆盛

3. 日本人の情報収集活動—帝国日本への協力
 - 3.1 日露戦争におけるロシア軍との諜報戦
 - 3.2 海軍省の機密通信囑託
 - 3.3 大手商社三井物産の参入
 - 3.4 膠州日本人協会の協力

おわりに

はじめに

第一次世界大戦勃発から第二次世界大戦終結までの間に青島は2度、合わせて16年に及んで日本の統治下に置かれ、上海と中国東北地方（旧満州）に次いで、日本による対中国投資の重要な中心地であった。第一次世界大戦、21カ条要求、五・四運動、山東出兵など青島をめぐる起こった一連の事件は近代の日、独、中関係を大きく左右した。しかし、現在、青島に関する多くの史実は、意識的に閑却されるか、あるいは無意識のうちに忘却されるため、近代の青島に対する認識は、歴史の現実との間に大きな隔りがある。

ドイツ統治下の青島では、天津、大連、上海、香港、さらに海を越え、日本、朝鮮、ウラジオストクとの間に人的・物的交流が行われていた。その後、日本帝国勢力圏の拡大と共に、青島もそのなかに組み込まれ、日本内地、植民地、占領地から多数の日本人が青島に渡った。最初300人だったその数は、第二次世界大戦終結前には4万人近くにまで膨張した。これらの人的移動は、資本、技術、生活、文化の移動を伴い、近代青島の政治経済、都市景観、生活様式等あらゆる方面に看過できない影響を与えていた。したがって、青島日本人社会の誕生、発展、終焉の過程と、それと同時に生じた政治経済、都市景観、文化生活の変容を究明することは、青島史のみならず、近代日中関係史、さらに東アジア近代史上

の青島の位置づけを再確認するために、極めて重要な作業である。

1897年、ドイツが青島を占領した後、日本人の青島進出も始まり、1914年に日本が青島を占領する以前に既に小規模な日本人社会が誕生していた。しかし、従来ドイツ統治下の青島をめぐる研究は、主にドイツの膠州湾占領とドイツの植民地政策を中心に行われてきた¹⁾。青島とドイツと日本との関係を中心に論じる研究²⁾も挙げられるが、日本人社会に着目する研究はわずかである³⁾。なおかつ、これらの研究は日本人商人の経済活動に集中しているため、この時期の青島日本人社会の具体像と全体像が見えてこない。例えば、日本人の青島にきた目的、出身地、青島での職業、活動区域など日本人社会の構造と、彼らと支配者であるドイツ人、現地中国人、そして母国日本との葛藤、連携などの一連の問題はまだ十分に歴史的に検証されていない。したがって、本稿では主に外務省外交史料館所蔵「海外在留本邦人職業別人口調査一件」と「日独欧州戦争関係救恤一件」⁴⁾という外務省記録に基づき、青島の一般日本人居留民とドイツ人、中国人及び日本政府との繋がりを念頭に置きながら、主に彼らの経済活動、情報収集活動を通じて、ドイツ統治下青島における日本人の進出と彼らの活動の実態を浮き彫りにしようと考えている。

1. ドイツ統治下青島の発展と日本人の登場

1.1 時代背景

1.1.1 日本人の山東進出

日本では明治維新後移民が開始され、明治期にはハワイ・北米に出稼ぎ型の移民、南米には農業経営のための移民が主に行われた。また、これとは別に、勢力圏・植民地への移民も行われた。隣国朝鮮の居留地への移民は1876年日朝修好条規の締結を皮切りに始まり、1880年には835人、1890年には7,245人、1900年には15,829人へと急激に増加する。南に目を移すと、日本領有下の台湾への進出は1895年に始まった。さらにフィリピン、マニラなど南洋の場合は、日露戦争以降からからゆきさん、道路工夫、大工等が進出した⁵⁾。中国については、1871年日清修好条規の締結より徐々に日本人の中国進出が始まり、1872年上海に、1875年天津に、1876年芝罘^{チーフ}に日本領事館が相次いで設置され、これを皮切りに日本人の山東進出の幕が開かれた。

1861年、芝罘は山東唯一の開放港口として選ばれた。芝罘は遼東半島を控え、かつ海関及び錦州附近との交通が便利であったために、これ等の地方の物品の多くは芝罘を経由するようになった。芝罘は、内地貨物の集散地、満州への交通要地、上海から東北への中継地として発達していった。1876年、芝罘に日本領事館が設置された。これにより、日本と山東の政府間での初めての正式的な交流が始まったともいわれる。李俊熙の「1914年以前日本人在山東」によると、日清戦争前、芝罘における日本人はただ20人であったが、1895年の日本の威海衛占領後には、桐の輸出業務に携わる日本人商人が多数現れた⁶⁾。大阪商船社員河野文一が1899年に北清各港を視察した当時、芝罘において、桐の木の輸出に従事する日本商行は6戸あったと記録した⁷⁾。1907年に芝罘日本人居留民団が成立した後は、居留民団出資の病院、小学校、幼稚園などの施設も徐々に整えられた。しかしながら、青島の発展や上海と満州との直接航行の開通に伴い、山

東内地と海外の貿易は次第に青島に集中するようになり、芝罘は貿易港の優勢を失った。1915年、山東を視察した日本通信局局長田中次郎は第一次世界大戦の日独戦役に従軍した野戦郵便部員の調べた情報に基づいて『山東概観』を編集した。それによると、1906年以来芝罘出入船舶の数とトン数は年々減少の傾向にあった。さらに、1903から1912年までの芝罘港、青島港の貿易額を比較すると、1910年から青島の貿易額が芝罘を超過したことが明らかになる。1912年の芝罘港の貿易額は1903年より5分の1近く減少したのに対して、1912年青島港の貿易額は1903年の4倍近くに増加した⁸⁾。1915年において、芝罘はただ山東北部沿岸に限ってジャンクによる貿易を行い、満州とわずかな関係を保つところになった。芝罘の衰退にともない、芝罘に滞在する日本人も減少した(表1)。

1.1.2 漁村から商業都市への変貌

一方、西欧諸国のなかでは植民地領有に一步遅れたドイツは、世界市場、特に東アジア市場に狙いを定めた。ドイツは中国で適切な植民地を探そうとして、舟山、アモイ、膠州湾などいくつかの選択肢から膠州湾を選び、1897年11月1日に山東曹州でドイツ宣教師2人が殺害されたことを口実に、同年11月14日に膠州湾を占領し、17年に及ぶ統治を始めた。

膠州湾青島を極東における模範的植民地にしようとするドイツ膠州総督府は、占領直後から青島港、山東鉄道、市街、植林、文化教育等あらゆる方面において植民地経営に力を入れ、全く無名の漁村を中国一大商業都市に発達させた。特に、青島港と山東鉄道は、青島を山東省内地と結ぶことで山東省の経済的統合を強めたほか、青島と海外、中国内地との交流や輸出入貿易を促進した。青島港の貿易額をみれば、1907年はまだ全国で第11位だったが、1912年には上海、漢口、天津、広東、大連に次ぎ、第6位に上っている。こうして膠州湾青島は、多くの労働力を

表1 芝罘における日本人の人数（1901年～1920年）⁹⁾

（単位：人）

年度	人数	年度	人数
1901年	128	1911年	381
1902年	218	1912年	410
1903年	265	1913年	483
1904年	800	1914年	492
1905年	559	1915年	402
1906年	508	1916年	389
1907年	408	1917年	453
1908年	410	1918年	484
1909年	389	1919年	351
1910年	396	1920年	323

（出典 JACAR（アジア歴史資料センター）「海外在留本邦人職業別人口調査一件」より作成。）

表2 膠州湾租借地における欧米人、日本人、中国人の人数変化（1902年～1913年）¹⁰⁾

（単位：人）

年次	欧米人 （イギリス人、アメリカ人、 ロシア人）	日本人	中国人 （青島区、大包島、 台東鎮、台西鎮）
1902年	688	78	14,905
1903年	962	108	28,144
1904年	1,057	152	27,622
1905年	1,225	207	28,477
1907年	1,484	161	31,509
1910年	1,621	167	34,180
1913年	2,069	316	53,312

（出典 欧米人の人数は「山東省視察概要」『山東省視察報文集』関東都督府民政部、1913年、13頁のデータによる。1902～1904年の日本人の人数は田原天南『膠州湾』満州日日新聞社、1914年、133～138頁のデータより作成。1905年、1907年、1910年、1913年の日本人の人数は「山東省視察概要」『山東省視察報文集』関東都督府民政部、1913年、13頁のデータによる。田原天南『膠州湾』満州日日新聞社、1914年、133頁のデータと一致する。中国人の人数は浅田進史『ドイツ統治下の青島—経済の自由主義と植民地社会秩序』東京大学出版会、2011年、229頁のデータによる。）

受け入れることのできる雇用の受け皿ができた。

地域における人口変動の要因は出生、死亡による自然増減と、転入、転出による社会増減があり、ドイツ統治期の青島では、転入による社会増が主因であった。1902年から1913年までの膠州湾租借地の人口推移を見ると、欧米人は700人弱から2,000人程度まで増加し、中国人は

15,000人ほどから53,000人程度に増え、都市の人口規模は次第に拡大していった。ドイツ占領以前は、膠州湾の住民は北部の膠州、即墨など伝統的な県域に集中して居住していたが、ドイツ統治後、インフラ施設の整備と経済上の発展とともに、青島に移住する人が年々増加する傾向を見せた（表2）。

1.2 日本人社会の構造

こうして青島の発展とともに、ドイツ帝国統治下青島に渡って来る日本人も次第に現れ始め、小規模な日本人社会が誕生した。以下では主に日本人の人数、進出ルート、職業構成とその活動区域からドイツ統治下における青島日本人社会の構造の一部を見ていきたい。

1.2.1 日本人の人数と進出ルート

1901年から1914年までの青島での日本人人口は、一時的な変動がありながらも、全体としては増加傾向を示している（表3）。小幅な人数の増減は日露戦争のような国際情勢の変動と深く関わっていた。1901年10月8日の読売新聞によると、ドイツが青島を占領してから2年後の1901年には、既に50人前後の日本人が青島で活躍していた。彼らの「内2名は神戸シーメンス商会の手代、他は出稼ぎ労働者にして、その多くは醜業婦」であったとされる¹¹⁾。1901年から1905年にかけては日本人の数が少しずつ増え続ける。特に1904年に日露戦争が勃発した影響で、中国東北方やウラジオストクから青島に避難してくる日本人が続出し、1905年秋の統計では日本人は210人に達した。例えば、ハルピンの川上写真館で働いた弘中ナカは、日露開戦の影響で1904年2月に600名余りの日本人とともに、芝罘領事水野

幸吉に従い芝罘に避難し、後に青島に移動した¹²⁾。また、日露戦争前にウラジオストクで活動していた数人の日本人商人も、日露戦争の勃発と同時に、一時的に日本国内に引き揚げたものの、その後間もなく膠州湾青島で営業を再開した¹³⁾。1905年に日露戦争が終わると、日本統治下に置かれた旅順、大連等の新占領地に移動する人も出たため、1905年から1909年にかけて日本人の数は少しずつ減少した。しかし、1909年から1914年までは再び増加の傾向を見せる。例えば、歯科医の佐藤定市は、青島で活動している飯尾松之助に勧められ、1910年に活動拠点を江蘇省から青島に移した¹⁴⁾。また、1909年に上海へ渡り、理髪業を営みながら、ハム、ベーコンを販売していた橋本徳松という人物は1911年に青島山東街で理髪兼旅館業を営む村田定吉の招きで青島に来た¹⁵⁾。こうして青島における日本人の数は、日本とドイツが開戦する前には343人に達している。

以上の考察から、第一次世界大戦前に青島に到来した日本人の進出ルートは、主に三つが挙げられる。一つは日本国内から直接渡航してきた場合、もう一つは中国国内の都市、南は上海、南京、北は旅順、大連、ハルピン、あるいは済南、芝罘等青島周辺の町を転々として青島にきた場合、そしてもう一つは朝鮮、ウラジオストクな

表3 ドイツ統治期青島における日本人の人数（1901年～1914年）

（単位：人）

年度	人数	年度	人数
1901年	50～60	1908年	161
1902年	78	1909年	156
1903年	108	1910年	169
1904年	152	1911年	211
1905年	210	1912年	205
1906年	189	1913年	283
1907年	178	1914年	343

（出典 1901～1904年は田原天南『膠州湾』満州日日新聞社、1914年、第133頁。1905～1914年はJACAR（アジア歴史資料センター）「海外在留本邦人職業別人口調査一件」より作成。）

ど青島や日本との間に緊密な貿易関係を持つ東アジアの都市から流入してきた場合である¹⁶⁾。

1.2.2 出身地の構成

ドイツが青島を占領してからおよそ15年後に当たる1914年時点で、青島に在留する343名の日本人の出身地を分類してみると、長崎県、熊本県をはじめ九州地方出身の人が圧倒的に多く、173人で全体の約半数に達した。第2位は近畿地方の出身者で、全体の15パーセントを占めた。全体的に見ると、西日本出身者が大半を占める。

華北において、もう一つ重要な日本人進出の拠点である天津に着目すると、1875年天津に日本領事館事務所が設置されたが、その後日本人の増加が極めて緩慢で、20年後の日清戦争勃発当時には、僅か48人しかいなかった¹⁷⁾。それから更に10年後の1906年に、天津における1,948人の日本人の内、大阪出身者は226人、兵庫県出身者は169人、東京出身者は165人、長崎県出身者は149人と示したように近畿、九州地方出身者が多い¹⁸⁾。

さらに、開港後の上海をみると、日清修好条規の締結から同じく15年経った1886年時点での上海における765人の日本人の内、総人数の半分以上を占めるのは九州地方の出身者で、合わせて397人もいる。それに次ぐのは関東地方出身の者で、103人を数える。そして、第3位は近畿地方出身の71人である。興味深いのは関東出身者の103人の内の61人は神奈川県出身で、さらにその内の多くは使用人として上海に居留する外国人に雇われる人たちであった¹⁹⁾。1875年の上海横浜間週1回の定期航路の開設と、活発な貿易活動は、上海横浜間の人的移動を促したと思われる。

初期の青島、天津、上海の日本人の出身地構成をみると、全体として西日本の出身者が多数を占めていた。この「西高東低」の傾向はほぼ満州に渡った日本人の出自とも共通する傾向である。それは西日本と東日本との社会構造の違いに由来する。すなわち、江戸時代以来、西日本の方がモノやヒトの移動が活発で、近代化への準備が進んでいた。加えて、九州地方は中国

表4 1914年青島、1906年天津、1886年上海における日本人の出身地分布

(単位：人)

1914年青島		1906年天津		1886年上海	
地域	人数	地域	人数	地域	人数
九州地方	173	近畿地方	555	九州地方	397
近畿地方	51	九州地方	434	関東地方	103
中国地方	43	中国地方	267	近畿地方	71
中部地方	24	関東地方	263	中部地方	22
関東地方	23	中部地方	194	中国地方	16
四国地方	17	四国地方	93	四国地方	5
東北地方	10	東北地方	33	東北地方	2
北海道	2	北海道	17	北海道	0
合計	343	合計	1,856	合計	616

(出典 青島はJACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B13080354500海外在留本邦人職業別人口調査一件第十四巻より作成。天津はJACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B13080306200海外在留本邦人職業別人口調査一件第一巻より作成。石川県、福井県、山形県のデータは含まれない。上海はJACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B13080299400海外在留本邦人職業別人口調査一件第一巻より作成。出身地が記載されない役人20人 (家族含め) と一般居住者と言えない海員70人を除く。)

との地理的、歴史的、文化的な距離が近く、古代から海外との往来が盛んだったとの理由が挙げられる²⁰⁾。

1.2.3 日本人の職業構成と活動区域

既に日本人の人数変化を分析したときに少し触れたが、1901年頃の青島で活躍していた50人前後の日本人の多くは出稼ぎ労働者である。5年後の1906年の職業構成をみると、189人の内、一番多いのは相変わらずドイツ人を相手とする娼妓で、43人を数える。それに次ぐのは写真業24人、裁縫16人であった。更に1914年の職業構成を見れば、343人の内、娼妓は引続き1位を占めたが、会社出張員（22人）、銀行員及び雇員（17人）、歯科医（7人）、新聞通信人（4人）のような業種に従事する人も明らかに増えていき、これは青島自身の発展と青島日本間貿易の増長と深く関わっていた。

それでは、これらの日本人はドイツ帝国統治下の青島で、どの地域で営業活動を行っていたのだろうか。ドイツ統治当初、青島は青島区、大包島、台東鎮、台西鎮の四つの区域に分けられた（図1）。当初青島区は欧米人の居住地と限定され、道路もドイツ皇帝やドイツの地名に因んで名づけられた。政治、経済の中心地としての青島区に、総督府庁や各国領事館の官庁、山東鉄道会社、独亜銀行等の大手企業が多数駐在していた。それに対し、大包島は青島区の北に当り、小港に面する所で、中国人の居住地域と指定され、ドイツ人、中国人と日本人が混在しながら生活していた。日本人は、青島区での活動が許可されたが、一定の資産を有する者とドイツ人の使用人、一部の芸妓たちは活動拠点を青島区に置き、それ以外は殆ど大包島を活動の拠点とした。例えば、青島区では商品販売に従事する大文洋行、歯科医佐藤定市、高橋写真は

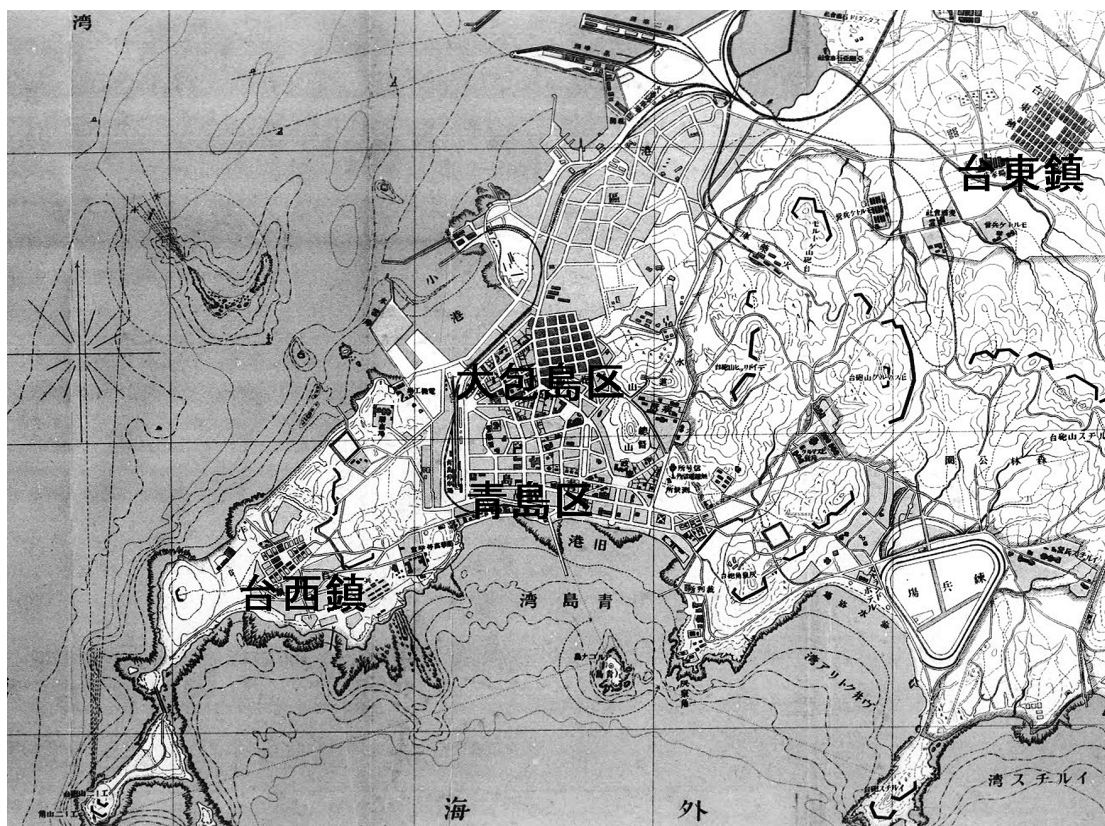


図1 膠州湾青島市街図
（出典 工藤謙『膠州湾事情』有斐閣、1914年。）

フリードリヒ街、岩城商会、湯浅洋行は皇帝街に店を構えた²¹⁾。一方、大包島では、芝罘領事館の報告によると、1902年時点で既に中国人商人200余戸、日本人の写真店と貸座敷業者数戸があった²²⁾。

2. 日本人の経済活動—中国、ドイツ人商人との競合と共存

膠州湾を占領した後、ドイツは膠州湾を管轄下に置くのみならず、膠済鉄道と鉄道沿線の鉱山の採掘によって、山東省全体を自国の勢力範囲に収める計画だったが、それは中国人の激しい抵抗をもたらし、中独両国の関係を悪化させた。当時山東巡撫に赴任した袁世凱は、彼の後任者である周馥とともに、武力抗争より経済支配権の強化を図り、ドイツ勢力を切り崩そうとしていた。こうした事情を背景に、山東政府は日本に接近し、日本の力を借りてドイツの公式的、非公式的な経済拡張を阻止しようと試みたのである。一方、ドイツの青島開発により、日

本の山東省での拠点であった芝罘が著しく衰退した。日本商人は、ドイツ勢力を抑え、日本商品の販路を拡大するために、新しい拠点を探す必要性を痛感していた。日本人が山東省に進出し、植民地支配者と現地人の間隙を縫って商業活動に従事した背景にはこのような事情があったのである。本章では雑貨店、写真店、薬屋を経営する小商人たちと、三井物産のような大商社の青島進出に着目して、ドイツ統治下の青島日本人の経済活動を考察してみたい。

2.1 小商人—雑貨商、写真店、大薬房の進出

当初青島に渡ってきた日本人の大多数を、雑貨、写真、売薬、理髪、洗濯業に携わる小商人たちが占めた。例えば、1903年12月の統計によると、当時青島滞在の154名の日本人のうち、妓楼は3戸60人、写真店は3戸16人、旅館は2戸9人、理髪店は2戸7人、裁縫店は2戸4人で、残りはほとんど洗濯業、菓子製造等小規模な商人だった²³⁾。

1899年から1906年までの間に日本人によって

表 5 青島における主要な日本人商店（1899 年～ 1906 年）

店名	開業時間	営業内容	店主・支配人	所在
金瀧洋行	1899年（一説1902年）	美術的雑貨	金瀧耕雲	山東街
石川号	1902年	呉服、化粧品	今村まつ子	滄口街
毛受号	1902年	各種写真	毛受駒次郎	飛芝喜街
松森館	1902年	旅館	友永金二郎	山東街
竹田号	1902年	高等洗濯	竹田山松	高密街
釘宮洋行	1903年	雑貨、呉服、太物	釘宮精一郎	膠州街
米英洋行	1903年	時計販売及修繕	菊川英二	山東街
高橋洋行	1904年	雑貨、刺繍、各種写真	鈴木友二郎	飛芝喜街
伊東号	1904年	各種写真	伊東聯補	博山街
東洋公司	1904年	カフェ	飯尾松之進	山東街
山田号	1904年	理髪	山田常二郎	山東街
小淵洋行	1905年	日本精製雑貨	小淵かる子	飛芝喜街
今村洋行	1905年	お酒、醤油、乾物、刺繍	中川きよ子	膠州街
納所号	1905年	理髪、時計修繕	納所雷吉	山東街
日華公司大薬房	1906年	内外各種売薬	鈴木友二郎	飛芝喜街
藤井兄弟商会	1906年	各種写真	藤井初太郎	山東街

（出典 曾根俊虎『東亜各港日本人職業姓名録世界各国日本人職業一覧』1907年、第55～57頁より作成。）

開かれた店を見ると（表5）、そのほとんどが写真、雑貨を経営する小商人だが、その中でも最も早く開業したのは美術雑貨を販売する金瀧洋行だった。この金瀧洋行の店主金瀧耕雲は日清戦争後、まず大連で雑貨店を開いたが、1902年に在青島日本人の今村徳重による誘いを受け、活動拠点を青島に移した。青島で金瀧耕雲は、取引相手を日本人に限らず、下駄、仁丹、大学目薬の他、特にドイツ人向けの陶器、中国人向けの帯子など幅広く取り扱った²⁴⁾。

また、この時期の日本人の職業構成を見ると、写真業に従事する人の多いことが目を引く。例えば1908年には161人の日本人のうち、写真業に従事する人が28人もいた。その中で、高橋写真屋は後に『青島写真帖』や青島風景を描いた絵葉書等の土産品を販売し、1943年まで40年以上にわたって経営を続けることができた²⁵⁾。「外人間に信用を博し、同業者中一流の老舗」²⁶⁾と評価されるように、日本人以外に、ドイツ人と中国人の間においてもよく知られ、例えば、中国国民党の要人譚延闓（後に国民政府主席となる）は1914年2月16日の日記のなかで、青島で家屋を探するとき、高橋写真館を訪れたと書いていた²⁷⁾。初代店主は高橋徳夫で、後でも触れる通り、高橋は写真店の他に、薬房や妓楼も開き、まさに青島日本人居留民の先駆者とも言える人物だった。当時ドイツ人は帰国する際に、よく絵葉書や日本雑貨を土産として持って帰っていたので、高橋写真店は、開店当初写真部と工芸部を設け、日本人写真技師と中国人店員を雇い、印画や絵葉書類等の商品を扱っていた²⁸⁾。

青島において日本写真館のあまりの数の大きさにドイツ統治当局も警戒を強める事態となった。1904年6月ドイツ警察署長は日本人協会の委員を呼び出し、日本人写真師が異常に多いことについて詰問した。さらに、青島市街内外において許可を得ていない無断の撮影行為を禁止するという命令までもが下された²⁹⁾。

また、青島における日本薬房の草分けであり、

当地でよく知られた老舗の一つ、日華薬房も当地で成功を収めた³⁰⁾。店主の鈴木友二郎は、1900年来青、最初に高橋写真店に雇われ、後に芝罘日本領事館小幡西吉³¹⁾ 領事の勧めにより、中国人との貿易に従事すると決意し、高橋徳夫から日華薬房を受け継いだ。1906年に山東街9号に日華薬房で中国人向けの木綿製品、日本製洋菓子を販売するとともに、売薬業も経営し、日本人店員5名、中国人3名を雇った。経営の拡大とともに、この日華薬房は済南にも店を開き、徳康祥、福順泰、福興隆等合わせて少なくとも28戸の中国商店と取引を行っていた³²⁾。

2.2 大手商社—三井物産の進出

2.2.1 日青間貿易の発展

青島の発展とともに、日本との貿易も多大な発展を遂げた。1913年の出港地別青島寄港汽船のトン数と隻数をみると、神戸からの汽船は114隻、251,824トンで、上海と芝罘に次いで第3位だった。また、青島日本間の直接貿易額も年々増加し、1912年について青島ドイツ間の貿易額を超え、第1位を獲得した。地理的な便宜性に加え、高価なドイツ商品に比べて安さも日本商品の山東省での浸透を促した。このような背景のもとで、三井物産をはじめ、日本の大手商社も営業拠点を青島に置くようになったのである。

2.2.2 大手商社の進出

1906年三井物産青島出張員の設置は日本大手企業の青島進出の嚆矢となり、それに続いて湯浅、岩城商会、日本綿花、江商といった大手商社も相次いで青島に出張所あるいは支店を置いた³³⁾（表6）。三井物産は1877年に成立してから日本の大手商社の代表として上海、天津、漢口、大連など中国の主要都市に支店、出張所を開設し、全般的に取引を行った。1913年の旅順民政署吉田豊次郎、有野学の視察報告によると、青島において、三井物産は日本貿易商のなかで最も勢力を持ち、他国商人と対抗できる巨頭とも

表6 青島における主要な日本人大手商社（1913年現在）

店名	営業内容	店主・支配人	使用人
三井物産株式会社 青島出張所	貿易	井手千次	日本人8人 中国人17人
湯浅洋行 青島出張所	貿易	峯村正三	日本人14人 中国人7人
岩城商会支店	海運業	津田靖平	日本人3人 中国人25人
日本綿花株式会社 青島出張所	綿糸、雑貨	土井米市	日本人2人 中国人8人
大文洋行 青島出張所	貿易	甲斐友比古	日本人5人 中国人5人
江商洋行	綿糸布貿易	阿部利七郎	日本人3人 中国人6人

（出典 外務省通商局『海外日本実業者之調査』1913年、50頁。）

言われる。同出張所の主任は、欧米商人によって組織された青島商業会議所に加入した唯一の日本人で、しかも、雇った中国人買辦も中国人の間の有力者で、当地中国人によって成立した商業会議所の会員でもあった³⁴⁾。しかし、当初青島と日本との貿易の主導権を握っていたのは日本人商人ではなく、青島、芝罘等山東沿海都市と神戸、大阪を拠点とする中国人商人であった³⁵⁾。1906年以降、三井物産をはじめとする大手商社の進出は特産物の輸出入貿易において影響力を伸ばしたが、全体として日本と青島との貿易をリードするまでには至らなかった。

以上見てきたように、ドイツ統治下の青島及び山東省市場においては、ドイツ商品と日本商品とのシェア争い、日中独三国商人が激しい競争を繰り広げていた。その中で、規模の大小を問わず、青島、済南、山東鉄道沿線にあるドイツ人、中国人を相手に商売を行い、緊密な取引関係を築いていた日本人商人たちの数は、決して少なくなかったのである。

2.3 ドイツ統治下日本妓楼の隆盛

夜の青島市街は新しい粧ひを凝らして、フ

レデリック街の横や、ビスマルク街の裏街には、緑や赤の点燈に彩られた明るいバーやカフェが、一入時を得顔に徐々と挑むような高い白粉の薫や、強烈な酒の香を漲らせて、独逸人のどろんとしたラインの歌や、支那人の亡国的な巫山戯声や、日本娘の舌だるい淫声が、脂ぎった空気を透して、しつとりと塵の沈んだ戸の外までも漏れ始める。口紅の濃い日本娘が、強い色彩を集めた日本服を着ている。（中略）青島の市街には既に20軒からの日本娘を蓄へた料理店や女郎屋があった。日本人の経営している日の家、枕水楼、寶月楼、支那人のやっている義昌号、旭光号、波止場から山の手へ行く道に聳え建つ広壮大雑貨店ジダス・ブランベック商会の右に当る石川号、松林館、これ等が先ず重立った色商人である³⁶⁾。

上に示したのは某日本人外交官と名乗る人物が書いた『青島の秘密』のなかの「青島の魔窟」という文章の一節である。多少誇張しているところがあると思われるが、夜の裏街のバー、カフェ、白粉と酒の混じる薫り、青島の魔性に溢れた空間、日本妓楼の活況が生々しく描き出さ

れている。その繁盛ぶりは、当時の新聞記事に「大通りにある三階建ての妓楼からよく弦歌が流れ、ガラス越しに友禅の舞姿が見えた」³⁷⁾と書かれたように、日本国内にも伝えられた。

元々明治維新以前から天草近辺の女性が長崎で娼妓になる例が多く、特に明治維新と1871年日清修好条規の締結後、上海をはじめ、各開港地に「からゆきさん」³⁸⁾と呼ばれる多くの熊本、長崎出身の女性が訪れ、東洋茶楼や妓楼を開き、性的サービスを提供した³⁹⁾。ドイツの租借地となった青島は一寒村から一大港口都市に発展し、「からゆきさん」にとっても新たな儲け口が潜んでいる新天地とも言えた。1914年時点で、343人の日本人の中には、この売春業を生業とする人が61人もいた（表7）。彼女たちは青島日本社会の重要な構成員であり、当時の青島の社会状況やドイツと日本との関係を知るための重要な手掛かりを提供してくれる。では、ドイツ統治下の青島において、日本妓楼はなぜ成功を収めることができたのだろうか。その隆盛は決して偶然ではなかったのである。

2.3.1 偏った性別構成

青島の男女比は、きわめて偏っており、そのことは男性の女性に対する性的暴力を引き起こ

す危険性をもたらした。1903年の青島都市部の中国人の内、10歳以上の男性25,221人に対し、10歳以上の女性は1,694人しかいなかった⁴⁰⁾。ヨーロッパ人の男性の人数も女性の人数を大きく超えており、例えば、1910年時点では979人の男性に対し、女性は203人しかいなかった⁴¹⁾。さらに、一般住民の他、2,000人余りのドイツ軍人が常時駐在して、現地の歪な性別構成を一層深刻化させた。ドイツ人男性の現地女性に対する度重なる嫌がらせは現地住民の不満を募らせ、中国人の長老と商人層はドイツ総督府に請願書を提出していた⁴²⁾。植民地秩序を維持するために、ドイツ人男性の欲求を満たすと同時に、いかに現地女性への性暴力を防ぐかがドイツ膠州総督府の直面した大きな課題であった。

2.3.2 黄禍論とドイツ総督府の取締政策

現地の女性との結婚、あるいは妾関係を築くことは上記の問題に対する一種の解決策となりえたが、ドイツ国家主義者は非ヨーロッパ人と安定した関係を築くことはドイツ人人種の純粋性と、ドイツの植民地での権威性を損なう危険を伴うとみて、安定した婚姻関係若しくは妾関係より、必要に応じて妓楼に通うほうが望ましいと考えていた⁴³⁾。この考え方は当時のヨーロッ

表7 青島の日本人総数と娼妓人数（1906年～1914年）

（単位：人）

年度	日本人総数	娼妓
1906年	189	43
1907年	178	57
1908年	161	54
1909年	156	30
1910年	169	44
1911年	211	42
1912年	205	50
1913年	283	55
1914年	343	61

（出典 JACAR（アジア歴史資料センター）「海外在留本邦人職業別人口調査一件」より作成。）

パやアメリカ等の白人世界で流行した「黄禍論」と深く関わっている。「黄禍」という言葉は日清戦争の頃、西欧のマスメディアによって頻繁に取り上げられ、主に中国人や日本人といった黄色人種に対する人種差別のニュアンスを持つ。ドイツ帝国の皇帝ヴィルヘルム2世は黄禍論の提唱者で、1895年に黄禍論を唱える絵「ヨーロッパの諸国民よ、汝らの最も神聖な宝を守れ！」をロシア皇帝ニコライ2世に送り、さらにフランス、アメリカの大統領にも送り、この絵のイメージは西洋世界に黄禍論が流布するきっかけとなったと言われている⁴⁴⁾。このような認識にもとづいて、ドイツ膠州総督府は1899年1月に警察規則の頒布により、青島の性的管理に乗り出し、解決策を売春業者に求めた⁴⁵⁾。当時ドイツ総督府の公式的な許可をうけた妓楼は5戸あり、そのうち、ロシア人が経営の妓楼は1戸、中国人妓楼は2戸で、日本人の開設した妓楼は最初2戸だったが、1903年に3戸に増えた⁴⁶⁾。中国人、白人、日本人娼妓のうち、日本人娼妓が最もドイツ人に好まれたと言われている。その理由について、支那研究会の出版した『山東の富源』が「彼女たちはほとんど天草、島原より青島に來た者で、日本内地のことをよく知らず、外国のことを知る。日本語を話すより、ドイツ語の片言のほうがよく聞こえた。日本人に対して恋はなく、ドイツ人をよく理解した」⁴⁷⁾というように、彼女たちの出身地の土地柄とも深く係っていたのである。

2.3.3 東洋第一の青楼—石川号

日本妓楼の中で、最も有名なのは「石川号」である。この「石川号」は25,000円も費やした立派な建物で、外壁が白亜に塗られており、ドイツ人の間で「東洋第一の青楼」とも呼ばれた⁴⁸⁾。初代主人、高橋徳夫は青島に渡った日本人の中でも先駆的存在で、妓楼の他、先述のように「高橋写真館」「日華薬房」も開き、当時大いに成功を収めていた。高橋徳夫は元々長崎でドイツ領

事館の通訳として勤め、仕事の関係でドイツ人との交際が広がったため、ドイツの青島占領後、すぐに青島に渡航した。青島ではドイツ人の友人の勧めに従い酒樓を開き、日本の芸娼婦を抱え、巨利を獲得した⁴⁹⁾。高橋が日露戦争で亡くなった後、石川号を継承したのは長崎県出身の今村徳重（石川徳重とも呼ぶ）である。今村は東京で高等教育を受け、卒業後中国へ渡り、当初は日本雑貨の商売を試みたが、失敗し、高橋の開いた妓楼に住み込んだ。その後、高橋の事業を継いで10万円ほどを儲けた⁵⁰⁾。

ドイツ当局の許可を受けていたもう一つの日本妓楼は、杉本安太郎が開いた「杉本号」である。杉本も高橋や今村と同じく長崎県出身で、1902年青島に渡航した後、同郷人今村徳重の勧めで、1903年3月にドイツ官憲の許可を獲得し、ドイツ騎兵隊が駐在する山東鉄道沿線の町、膠州に料理店を開業し、娼婦7名を抱えた。後にドイツ騎兵隊の撤退によって、1905年に大包島の李村街に店を移転した。1914年に日本とドイツとの戦争が勃発する前には、16名の娼婦が在籍していたという⁵¹⁾。

3. 日本人の情報収集活動—帝国日本への協力

以上、主に青島に進出した日本人居留民の経済活動を中心に論じてきた。ところで、これらの経済活動は単なる一般的な貿易活動でなく、その多くがもう一つの側面を有していた。つまり、政府と関係なく、生活のために経済的な事情で青島に渡った多くの一般人が、青島で生活しているなかで、次第に母国に接近し、帝国日本を支えることになる。以下では、青島の日本人の情報収集活動を中心に彼らの帝国日本への協力の実態を考察したい。

3.1 日露戦争におけるロシア軍との諜報戦

日露戦争中、ロシア軍が清国人を商人に変装させ、日本軍の動向を探り、満州軍を大いに悩

ませたのに対し、1904年6月に創設された満州軍総司令部は中国大陸各地に大諜報網を張り巡らせた。当時、営口と芝罘の通信機関にロシアのスパイが多数潜伏していることを知った日本軍は、芝罘領事館を通じて、ロシア軍の動きを注視していた⁵²⁾。当時、芝罘日本領事館の管轄範囲にある青島では、各国人が混在し、軍人と、国際商社や政府機関に勤める外国人が多く、国際的な政治、経済事情に触れるチャンスも多かった。さらに、自由港として開かれた青島港では、各国軍艦と商船が頻繁に行き来し、世界中の情報が青島に持ち込まれてきた。こうして情報収集に最適な窓口である青島において、日本人居留民は経済活動を展開する傍ら、情報収集活動にも秘かに携わっていたのである。

1904年11月、清国駐屯軍司令官仙波太郎⁵³⁾は物資調査のために、茂野一顕主計を山東に派遣した。茂野は11月13日に膠州湾に到着後、青島で「毛受号」を経営する毛受駒次郎と共に、清国海関副長を勤めるイギリス人ハニッシュのもとを訪れ、膠州湾でのロシア軍の動静を探った。その結果、ドイツ人商人とロシア人将校とが連携し、旅順及びウラジオストクへ食料品、弾薬等の物資を密輸していたことが判明した。その具体的な方法は、ロシア汽船が海上ではイギリスの国旗を揚げ、入港の際はドイツ国旗に変え、青島で有名な哈利洋行、順和洋行、礼和洋行等ドイツの大手商社を通じて、牛肉の塩漬けや鉄材、弾薬を汽船に積み込むというものであった。このロシア船は、アメリカ行きと偽っていたが、実際はウラジオストクや旅順に向かったのである⁵⁴⁾。

3.2 海軍省の機密通信囑託

さらに、日露戦争が終わった直後の1906年、海軍省より芝罘日本領事館領事小幡西吉のもとに青島での機密通信囑託を今村徳重に依頼したいという連絡が届いた。この今村徳重は前述の通り、長崎県出身で、東京で高等教育を受けた人で、青島屈指の妓楼「石川号」の支配人でもあっ

た。彼は妓楼を経営する傍ら、青島のドイツ人、イギリス人等を通じて無報酬情報収集活動にも携わった。早くは日露戦争前より、青島における一切の通信はすべて今村に依頼し、芝罘領事館との間には特殊な暗号までもが設けられた。日露戦争の際には、今村は30人ほどの芸妓、娼妓に命じ、遊びに来るドイツ軍人から軍事上の秘密を探り、それを日本当局に報告したことで、日本軍は大いに活動の便を得たと言われている⁵⁵⁾。

3.3 大手商社三井物産の参入

このような情報収集活動は、個人だけでなく、当地の大手貿易商社三井洋行も携わっていた。前述のように、三井物産は1876年の設立直後から、1877年に上海に支店を構えたのを皮切りに、天津、漢口、大連等各重要都市にも支店、出張所を開き、大豆、落花生等の特産物の輸出貿易を中心に経済活動を展開した。ところが、その活動はただ経済分野に限るというわけではなかった。例えば、日清戦争において、三井が社船6隻を軍用に供出し、石炭の輸入と軍需品の輸送に協力したことや、義和団の乱の勃発と同時に中国語の分かる社員を陸軍通訳として派遣させたこと等からもわかるように、国家の海外進出に協力するある意味で国家的な存在でもあったのだ⁵⁶⁾。もちろんドイツ統治下の青島においても、三井物産は日本当局と連携し、陰から国の活動を支えていた。当時ドイツ電信局が同地清国電信局の取り扱う電報を時々検閲していたため、ドイツ当局の嫌疑を避けるために、日本側は当地の通信員との間に暗号を設け、さらに仲介人を通じて連絡する方法をとる必要があった。1906年7月以降、海軍省機密通信囑託となった今村は、現地の三井洋行を通じて、東京の三井物産社員小泉吉彦経由で日本当局に情報を提供し続けた。中国辛亥革命当時、今村は漢口、膠州湾におけるドイツ軍の行動を探り、日本当局に報告したことで、勲6等まで授けられた。その後、今村は活動の拠点を朝鮮燕岐郡に移し、

彼の推薦で、青島で「金瀧洋行」を経営していた金瀧耕雲がその後任者となり、青島での情報収集活動を続けた⁵⁷⁾。

3.4 膠州日本人協会の協力

もう一つ注目すべきは膠州日本人協会の活躍である。1902年、青島には日本人の数がまだ100人にも満たないにもかかわらず、同年10月に膠州日本人協会⁵⁸⁾が早々に青島で設立された。当初会長1名、委員6名、事務員1名が置かれ、会員より毎月金30銭の会費を徴収すると会則に記された⁵⁹⁾。膠州日本人協会はただ青島で生活している日本人全体に亘る親睦団体で、特に経営する事業がなく、主に日常の連携や日本内地来客の招待を担当する単純な親睦団体に過ぎないように見えるが、実はそのメンバーたちは様々な形で母国と絡み込み、陰で帝国日本の海外拡張を支えていた。

第1期委員の構成を見ると、草創期に青島に来た日本人の先駆高橋徳夫、高野房太郎⁶⁰⁾、小林芳一の他、日本海軍省の機密通信囑託今村徳重とその後任者金瀧耕雲、ロシア軍の情報を日本軍に提供した毛受駒次郎というように、創立委員の6人の内、少なくとも3人が日本当局と連携して情報収集活動に携わっていたことが判明した。創立メンバー以外でも、日本人会の書記、山崎金太郎という人物も間諜活動と係った。山崎金太郎は1909年頃江南造幣局で技師と通訳として雇われたが、排日機運の高まりに伴う日本人の解雇の影響で、後に青島に渡り、仲介業と通関代弁を営みながら、日本人会の秘書も勤め、ドイツの青島防衛状況を収集して秘かに日本軍に提供した⁶¹⁾。

日本が第一次世界大戦の日独戦役でドイツに勝ち、青島を日本帝国の管轄下に収めたと同時に、多数の日本人が各地から一気に青島に入り込んだ。1914年4月15日の『青島新報』によると、「青島市民会は既に成立したので、戦争前青島在留同胞の団体たる青島日本人会は今後存続の必

要なき、近日青島本願寺出張所に総会を開き、解散式を行う予定」⁶²⁾であった。ところが、膠州日本人協会の活動はそれから一切なかったとは言えない。日独戦争前に青島で生活していた日本人のなか、戦争によって損害を被った人々は少数ではなかった。彼らの代表として、膠州日本人協会の会員から7人の救恤請願委員と11人の損害審査委員が選ばれた⁶³⁾。紆余曲折の末、1925年によりやく救恤金が下付されることで、ドイツ統治期に成立した膠州日本人協会も歴史の表舞台から姿を消した。

おわりに

第一次世界大戦勃発後、日本は日英同盟にもとづき、1914年8月16日にドイツに最後通牒を布告した。その後青島における日本人はドイツ当局から退去命令を受け、一部は急遽済南、芝罘に避難し、一部は上海、天津経由で日本に引き揚げた。同年11月、ドイツに勝った日本軍は青島を占領し、それと同時に多くの一般日本人が一気に青島へと流入した。戦前から青島で暮らしていた日本人も青島に帰ってきたが、戦争で受けた被害に加え、従来のドイツ人、中国人の得意先を失い、日本人同業者との競争も激しくなり、大手商社とごく一部の商人を除けば、ドイツ統治時代に青島で生活していた日本人たちは結局長年の間築いてきた経営基盤を失った。

ドイツ統治下の青島日本人社会を概観すると、ドイツの占領後、日本人が青島で姿を現し始め、15年ほど経った1914年には300人余りの小規模な日本人社会を形成した。この15年間、日本人の人数は日露戦争のような国際情勢の変動の影響を受け、一時的な増減がありながらも、全体として増加の傾向を示した。それは、ドイツ統治下に置かれた青島の商業港口都市への変身と青島日本間貿易活動の活発化と深く関連する。青島に到来した日本人の進出ルートと出身地も主に以上の2点に規定され、即ち、国際情勢の変化の中、日本国内は九州地方と近畿地方、中国国

内はハルビンや上海、更にウラジオストクのような青島と海上交通の便利なところ、貿易が盛んに行われた地域から「モノ」の交流ルートに乗じて「ヒト」が到来した場合が多かった。また、職業構成の変化を見ると、最初は売春婦、雑貨商、いわゆる一旗組の移民、つまり生活のために青島に自発的に渡ってきた一般人が大多数であったが、三井物産出張所の開設を嚆矢に、岩城、日本綿花、湯浅、横浜正金銀行など大手商社も次第に進出していった。一部の大手商社と有力者は青島区に営業拠点を設け、他の一般日本人はほとんど大包島で中国人と混在しながら暮らしていた。ドイツの租借地青島では、彼らのほとんどが現地中国人と同じく、西洋文明を受容する側の立場であり、他国人と競争、連携しながら生計を立てていた。ドイツ商品と日本商品の市場争いや青島日本間輸出入貿易の主導権をめぐる中国商人と日本商人との競争が三者の関係を緊張させたが、一方、からゆきさん、写真屋、雑貨商といった人々も、山東省内陸に進出した大手商社も足場を固めるために、当地のドイツ人商人や中国人商人と良好な関係を築くことが求められた。更に、母国日本との関係をみると、生活のために青島までたどり着き、政府と直接的な関係を持たなかった一般日本人居留民たちは、日本帝国勢力圏の周縁にありながら、各自の仕事、人脈を通じて情報収集活動に携わり、日本帝国の活動を陰で支えたのである。

このように、本論文はドイツによる膠州湾統治から日本による第1次青島占領にかけて、青島における日本人の人数、職業、出身地、活動区域を明らかにした。そのなかでも特に中小商人の経済活動、情報収集活動を考察することによって、ドイツ統治下の青島日本社会の具体像と全体像を提示することを試みた。ドイツ統治下の青島の日本社会は上海、天津開港当初と同じく小規模で、初期はからゆきさんと雑貨商が中心となり、西洋国家が作った既存の社会システム、規範を受け入れる立場にあったのである。

第1次世界大戦以降、青島におけるドイツ人と日本人の地位は逆転する。この逆転が青島における日本社会、日本人と現地中国人の関係、さらに近代日本にとっての青島の位置づけにどのような変化をもたらしたのかは今後の課題にしたい。

注

- 1) 浅田進史『ドイツ統治下の青島—経済の自由主義と植民地社会秩序』東京大学出版会、2011年。Kalaus Mühlhahn著、孫立新訳・劉新利校正『在「模範植民地」膠州湾的統治与抵抗—1897～1914年中国与德国的相互作用—』山東大学出版社、2005年。斎藤聖二「日独青島戦争の開戦外交」『国際政治』第119号、1998年、192～208頁。大山梓「日独戦争と青島占領」『廣島法學』第1巻第2号、1978年、1～28頁。
- 2) 瀬戸武彦『青島から来た兵士たち—第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006年。第一次世界大戦で青島から日本に連れてこられたドイツ人捕虜たちの現地日本人との交流活動を考察し、日本、ドイツ文化交流史上的一幕を明らかにした。他には、福田秀雄「日本におけるドイツ人捕虜とその林業技術」(『林業技術』第298号、1967年、22～24頁)、垣本せつ子「板東收容所新聞『ディ・バラック』の中のドイツ—『ミンナ・フォン・バルンヘルム』の上演の意義」(『国際地域学研究』第2号、1999年、29～38頁)などの関連研究もある。
- 3) 庄維民、劉大可『日本工商資本与近代山東』社会科学文献出版社、2005年。李俊熙、趙顕鎬「1914年以前日本人在山東」『東方論壇』2000年第4号、82～86頁。
- 4) 「日独欧州戦争関係救恤一件」は主に日独戦争によって損害を被った日本人が日本政府に対して提出した救恤申請書の記録であり、ドイツ統治時代の青島における日本社会の状況を知るための重要な史料でもある。青島において、日独戦争前から青島に滞在する日本人の内、世帯主である者は申請資格を持っていた。現在調べた135通の申請書には、申請者の名前、本籍地、現住地、職業、損害発生場所、損失明細書、取引相手、避難経過などの情報が記載されている。ただ、損失金については、実際の損失より大げさに捏造された可能性が高いため、本論文では主に金額以外の基本情報に基づき、分析を

行う。

- 5) 高崎宗司「まえがき」『近代日本と植民地第5巻 膨張する帝国の人流』岩波書店、1993年、vii頁。
- 6) 李俊熙「1914年以前日本人在山東」『東方論壇』2000年04期、82～86頁。
- 7) 河野文一「北清各港視察報告書」1899年、57頁。
河野文一は当時大阪商船株式会社社員として、上海、天津、威海衛、膠州湾、芝罘などの開港地を視察した。
- 8) 田中次郎『山東概観』1915年、49～51頁。
- 9) 1905～1920年のデータはJACAR（アジア歴史資料センター）「海外在留本邦人職業別人口調査一件」と副島田照「戦前期中国在留日本人人口統計（稿）」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第33号、1984年、22頁）とは異なる。本論文ではJACAR（アジア歴史資料センター）「海外在留本邦人職業別人口調査一件」のデータに統一する。
- 10) 『膠州湾』は1914年12月満洲日日新聞社の発行する著書で、著者田原天南は満洲日日新聞社の主筆である。後藤新平の序文によると、田原天南は植民地の研究者で、特にドイツの中国拡張政策に詳しい人物であり、ドイツと青島を視察し、当時発行した欧文史料と日本語資料を集めて『膠州湾』という本を完成させたのである。また、この本は先行研究にもよく使われた文献である。
- 11) 『読売新聞』1901年10月8日。
- 12) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09072797000日露戦役個人損害関係法律並ニ勅令ニ基ク救恤金関係雑件第十七巻。
- 13) 例えば、日露戦争前にウラジオストクで時計商、理髪業、洗濯業を営んだ納所雷吉、大久保傳一、宮本伊代治、原萬吉、渡辺春吉、松本弥市などは日露戦争勃発後、直ちに帰国したが、1904年年内に青島で営業を再開した。JACAR（アジア歴史資料センター）日露戦役個人損害関係法律並ニ勅令ニ基ク救恤金関係雑件による。
- 14) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09073085600日独欧州戦争関係救恤一件申請書第四十一巻佐藤トミ。Ref. B09072927700日独欧州戦争関係救恤一件申告書第十四巻、62～64頁。
- 15) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09073075100日独欧州戦争関係救恤一件申請書第三十六巻橋本徳松。
- 16) 主にJACAR（アジア歴史資料センター）「日露戦役個人損害関係法律並ニ勅令ニ基ク救恤金関係雑件」と「日独欧州戦争関係救恤一件」に記載された個人の履歴書によって分類した結果で

ある。

- 17) 小林元裕「天津のなかの日本社会」『天津史 再生する都市のトポロジー』天津地域史研究会、1999年、188～189頁。
- 18) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B13080306200海外在留本邦人職業別人口調査一件第五巻、66頁。
- 19) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B13080299400海外在留本邦人職業別人口調査一件第一巻。
- 20) 小峰和夫『満州紳士録の研究』吉川弘文館、2010年、33頁。
- 21) JACAR（アジア歴史資料センター）日独欧州戦争関係救恤一件、大文洋行、佐藤トミ、田島定助、鈴木豊、三河一二、田辺郁太郎、大谷豊顕、小田真、大塚弥、峰村正三の申告書による。
- 22) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B03041176500独国ノ膠州湾租借関係一件第三巻。
- 23) 通信省管船局『清国長江及附近航運事業取調書』1904年、100～101頁。
- 24) 開業時期については、一説には1899年で、一説には1922年だが、どちらにしても青島開港から早期に開業したのは間違いない。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09073083000日独欧州戦争関係救恤一件申請書第四十巻金瀧耕雲。
- 25) 『全支商工名鑑』中国通信社、1948年、687頁。
- 26) 青島興信所『山東日支人信用秘録』青島興信所、1926、156頁。
- 27) 『譚延闓日記』1914年2月16日、48頁。
- 28) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09073080000日独欧州戦争関係救恤一件申請書第三十八巻鈴木トヨ。鈴木トヨは1905年高橋写真館を継承した。
- 29) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B07090027400膠州湾附近ニ於ケル独国ノ軍事的経営及政策関係雑纂。
- 30) 青島興信所『山東日支人信用秘録』青島興信所、1926、349頁。
- 31) 小幡西吉（おばたゆうきち）（1873～1947）明治から昭和時代前期の外交官。『国史大辞典』
- 32) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B09073079900、日独欧州戦争関係救恤一件申請書第三十八巻鈴木友二郎。
- 33) 『三井物産会社小史』第一物産株式会社、1951年、第147頁。
- 34) 「山東省視察概要」『山東省視察報文集』関東都督府民政部、1913年、15頁。
- 35) 庄維民、劉大可『日本工商資本与近代山東』

- 社会科学文献出版社、2005年、47頁。
- 36) 著者不明『青島の秘密』近代文芸社、1914年、15頁、32～33頁。
- 37) 『時事新報』1916年1月15日。
- 38) 明治から昭和初期にかけて、天草島あたりから南方に出稼ぎに出かけた女子。多くは売春婦として送られた。『日本国語大辞典』
- 39) 劉建輝『魔都上海: 日本知識人の「近代」体験』講談社、2000年。唐権『海を越えた艶ごと : 日中文化交流秘史』新曜社、2005年。
- 40) 浅田進史「植民地権力と越境のポリティクス : 膠州湾租借地におけるドイツ統治を再考する」『境界研究』(3)、2012年、117～134頁。
- 41) Daniel J. Walther「Sex, Race and Empire: White Male Sexuality and the “Other” in Germany’s Colonies, 1894–1914」『German Studies Review』第33巻第1号、2010年2月、45～71頁。
- 42) 浅田進史「植民地権力と越境のポリティクス : 膠州湾租借地におけるドイツ統治を再考する」『境界研究』(3)、2012年、117～134頁。
- 43) Daniel J. Walther「Sex, Race and Empire: White Male Sexuality and the “Other” in Germany’s Colonies, 1894–1914」『German Studies Review』第33巻第1号、2010年2月、45～71頁。
- 44) 飯倉章『黄禍論と日本人 欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』中公新書、2013年。
- 45) 浅田進史「植民地権力と越境のポリティクス : 膠州湾租借地におけるドイツ統治を再考する」『境界研究』(3)、2012年、117～134頁。
- 46) 『青島市解放前医薬衛生概況1897.11–1949.6』青島市衛生誌編委会辦公室、青島市衛生局史誌辦公室、1990年、14頁。
- 47) 支那研究会『山東の富源』活人社、1914年、166頁。
- 48) 『読売新聞』1902年3月4日。
- 49) 田原天南『膠州湾』満州日日新聞社、1914年。
- 50) 「膠州湾の日本人の花形」『地球』1(7)博文館、1912年、138～141頁。
- 51) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B09073079800日独欧州戦争関係救恤一件申請書
- 第三十八巻杉本安太郎。
- 52) 長谷川怜「日露戦争と戦場の諜報戦—発信原稿満州軍参謀部諜報部の再発見」『軍事史学』第42巻2号、2006年9月、118～141頁。
- 53) 仙波太郎(せんば たろう)(1855～1929)日清・日露戦争に従軍。明治43年陸軍中将、大正3年第一次大戦時に第三師団長。桂太郎、宇都宮太郎とともに陸軍の三太郎と称され声望があった。『日本人名大辞典』
- 54) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C06040060200海軍次官宛琴州湾視察の件報告。
- 55) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090503300青島今村徳重郎二海軍通信囑託一件。支那研究会『山東の富源』活人社、1914年10月、166頁。
- 56) 第一物産株式会社『三井物産会社小史』1951年、71～98頁。
- 57) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090503300青島今村徳重郎二海軍通信囑託一件。「膠州湾の日本人の花形」『地球』1(7)博文館、1912年、138～141頁。
- 58) 名称は膠州日本人協会、所在は青島。
- 59) 『清国芝罘、威海衛、旅順口、青泥窪、牛莊、膠洲及上海視察報告書』横浜税関、1904年、434頁。
- 60) 高野房太郎(たかの ふさたろう)(1869～1904)日本労働組合運動の創始者。統計学者高野岩三郎の兄。1900年(明治33)に入って労働組合運動が衰退に向かうと運動から手を引き中国に渡り、明治37年3月12日、青島のドイツ病院で死去した。『日本大百科全書』
- 61) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B09073074400日独欧州戦争関係救恤一件申請書第三十六巻山崎金太郎。
- 62) 『青島新報』1914年4月15日、2頁。
- 63) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B09073075500日独欧州戦争関係救恤一件申請書第三十六巻、青島関係公信。
- (2017年12月12日 採択決定)

The Influx of Japanese in Tsingtao during the Rule of Germany (1897–1914):

Focusing on Economic and Information-Gathering Activities

SHAN Hejun

Department of Japanese Studies

School of Cultural and Social Studies

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

Imperial Japan invaded Tsingtao twice and was dominant there for sixteen years in total. After Shanghai and Manchuria, Tsingtao was the next important area for Japan's foreign 'investment' in China. With Japan's imperialistic expansion, thousands of Japanese moved into Tsingtao, and approximately forty thousand Japanese resided there until the Second World War ended. The influx of Japanese impacted on Tsingtao's local society, for they brought with them capital and technology, and a different lifestyle and culture. However, previous studies have mainly focused on the German occupation and its policy, and little attention has been paid to the Japanese community in Tsingtao under German rule or to the relationships between German, Chinese, and Japanese during the period.

This paper explores the organization and the activities of the Japanese community, while examining economic as well as information gathering activities carried out by ordinary Japanese in Tsingtao. The first section reviews the number of Japanese residents, their backgrounds, such as hometown and occupation, their motivations for moving to Tsingtao, and the routes they took to travel to Tsingtao.

The second section investigates how the Japanese cooperated and competed with the Germans and Chinese, while also examining economic activities conducted by Japanese people such as petty traders, businessmen from large enterprises, and prostitutes called *karayuki-san*.

In the third section, I attempt to demonstrate the cooperative relationship between ordinary Japanese and the imperial Japanese government, through an examination of how Japanese engaged in information-gathering activities in Tsingtao. Finally, in the last section, I will discuss the transformation of the Japanese community after the First World War.

Key words: Tsingtao, German, Japanese community, economic activities, information-gathering activities